☑ サマリー

1ST

Chapter I-1

中小企業診断士試験とは

Point

- 中小企業診断士とは、経営コンサルタントの国家資格
- 二次試験では、"問題解決力"が問われている

中小企業診断士	"経営コンサルタントの国家資格"
経営コンサルタント	"経営" ＋ "コンサルタント"
コンサルタント	"問題解決"のプロ

1次試験：＂経営＂知識を問われる試験
2次試験：＂問題解決＂力を問われる試験

中小企業診断士試験は、何を問われているのでしょうか？
中小業診断士とは「経営コンサルタントの国家資格」という位置づけです。この"経営コンサルタント"という言葉に着目します。この言葉は、2 つの単語に分解することができます。

１つ目は「経営」、２つ目は「コンサルタント」です

「コンサルタント」というのは、一般的には問題解決のプロといわれます。中小企業診断士試験では、この 2 つに関係する能力が試されます。
1 次試験では経営コンサルタントの"経営"部分・すなわち経営知識を問われ、
2 次試験では経営コンサルタントの"問題解決"部分を問われています。

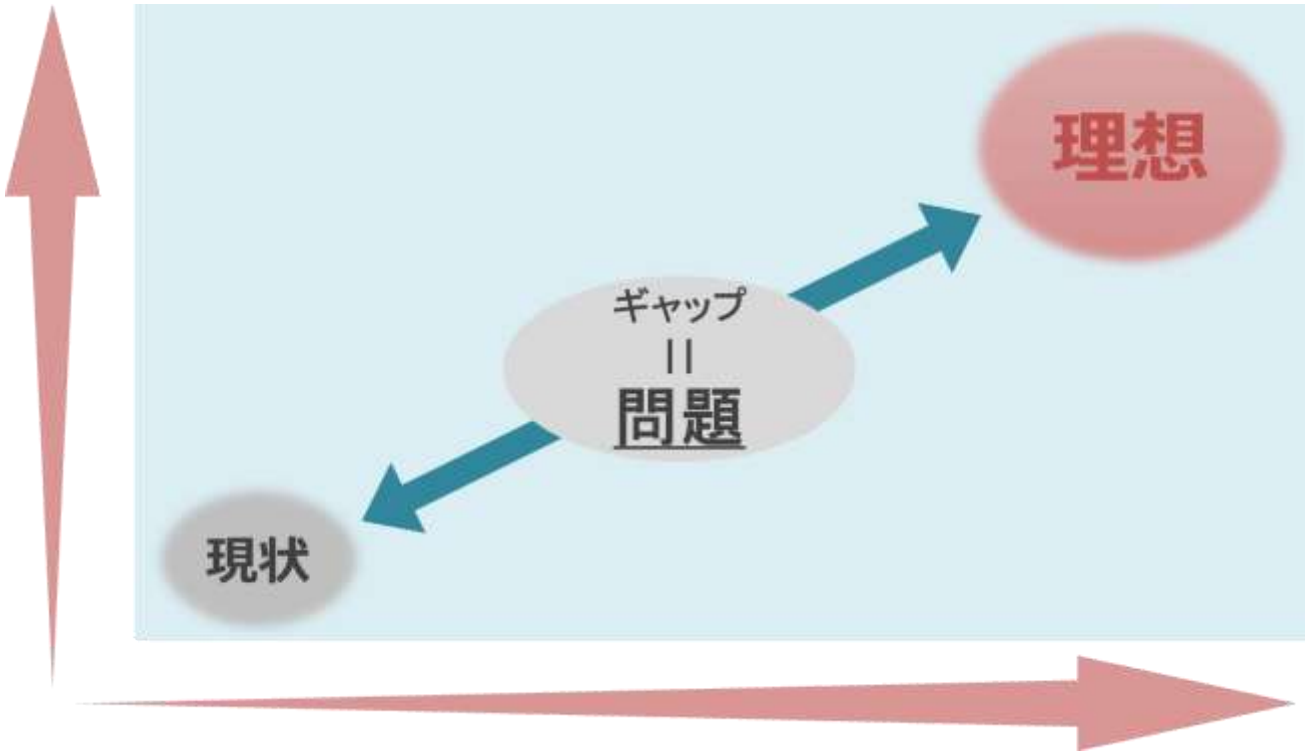
Chapter I-2

問題の定義

問題の定義

Point

- “問題”とは、「理想と現状との”ギャップ”」　（あくまで一つの定義）
- “問題解決力”とは、このギャップを埋める能力



2 次試験で問われる問題解決力について説明する前に、一般的な問題の定義、及び問題解決力について説明します。あくまで一つの定義ですが、問題というは、理想の状態と現状との間のギャップであり、問題解決力というのは、このギャップを埋める能力のことです。次に、2 次試験について解決すべき問題を考えます。

2 次試験における問題

Point

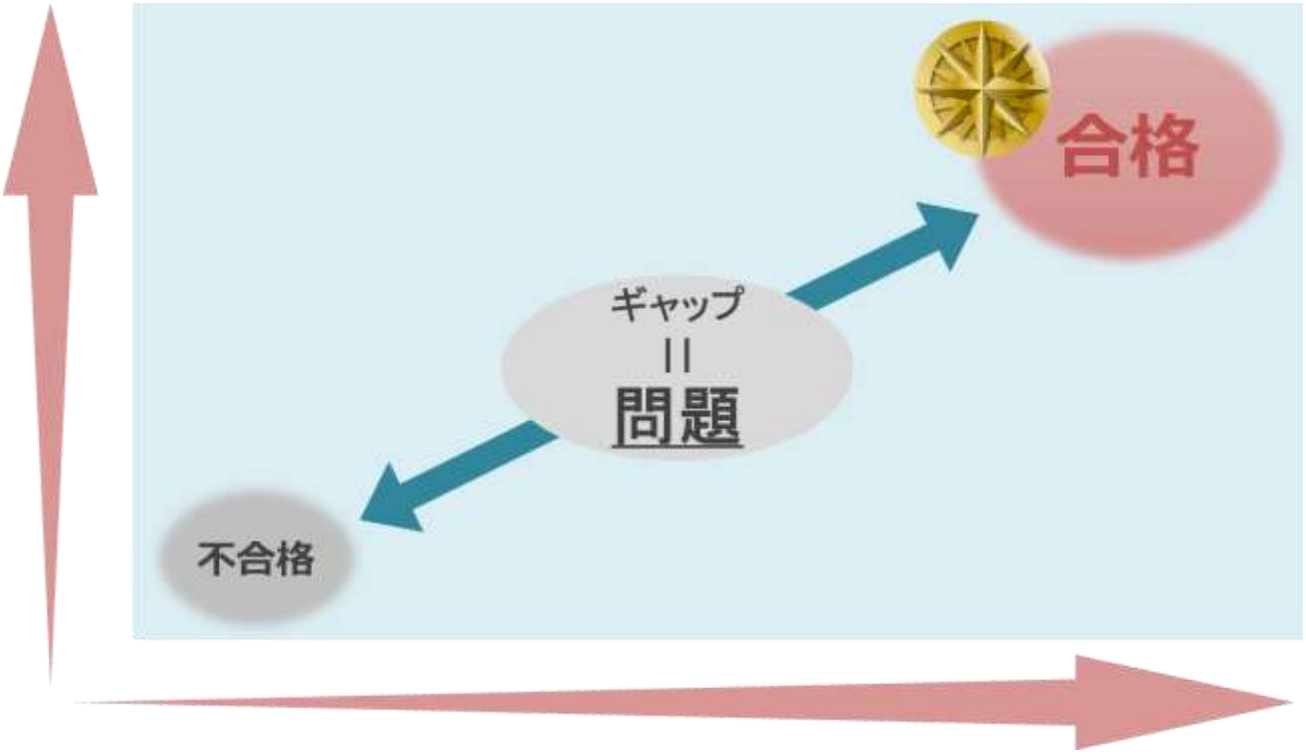
- 2 次試験での理想の状態は、”試験に合格(平均 60 点)”
- “合格と不合格との間のギャップを埋めること”自体が問われている

次に、2 次試験そのものについて解決するべき問題について考えてみます。

- 理想の状態は、もちろん試験に合格することであり、言い換えると試験で平均 60 点以上をとることになります。
- 現状は、不合格な状態、言い換えると平均で 60 点をとれない状態です。

2 次試験では、この間のギャップを埋めること自体が問われています。

当たり前と思っていても、2 次試験の勉強は長期戦、もしくは 6 週間程度の短期集中で行うことになります。ただただ、スケジュールに追われ、問題数だけをこなしこのギャップを埋める作業を忘れてしまうことがあります。このギャップを埋めることができなければ、不合格の場所で足踏みしているだけです。

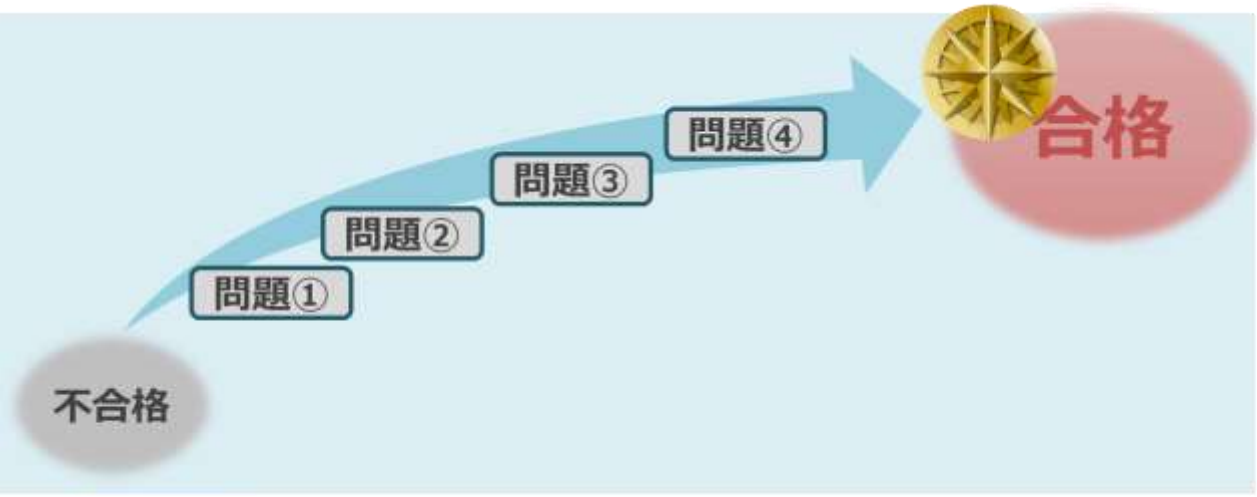


次は、合格までのギャップを埋めるために問題を細分化していきます。

2 次試験における問題の細分化

Point

- 理想にたどり着くために、2 次試験の問題を細分化
- 2 次試験の問題は 4 つに分解可能



問題①	“正解”が分からない
問題②	“正解を生み出すプロセス”が分からない
問題③	“80分で正解を生み出すプロセス”が分からない
問題④	“80分で正解を生み出すプロセス”を活用できない

2 次試験での問題を解決するために、まずは問題を細分化します。問題は、4 つに分解できます。

- **問題 1：正解が分からない。**
  診断士二次試験では、正解が公表されていません。そこで、まずは正解を設定する必要があります。

- **問題 2：正解を生み出すプロセスが分からない**
  正解が分かったとしても、正解を生み出せなければ意味がありません。

- **問題 3：80 分で正解を生み出すプロセスが分からない**
  正解を設定して、生み出せるようになったとしても、試験時間内に生み出すことができなければ意味がありません。

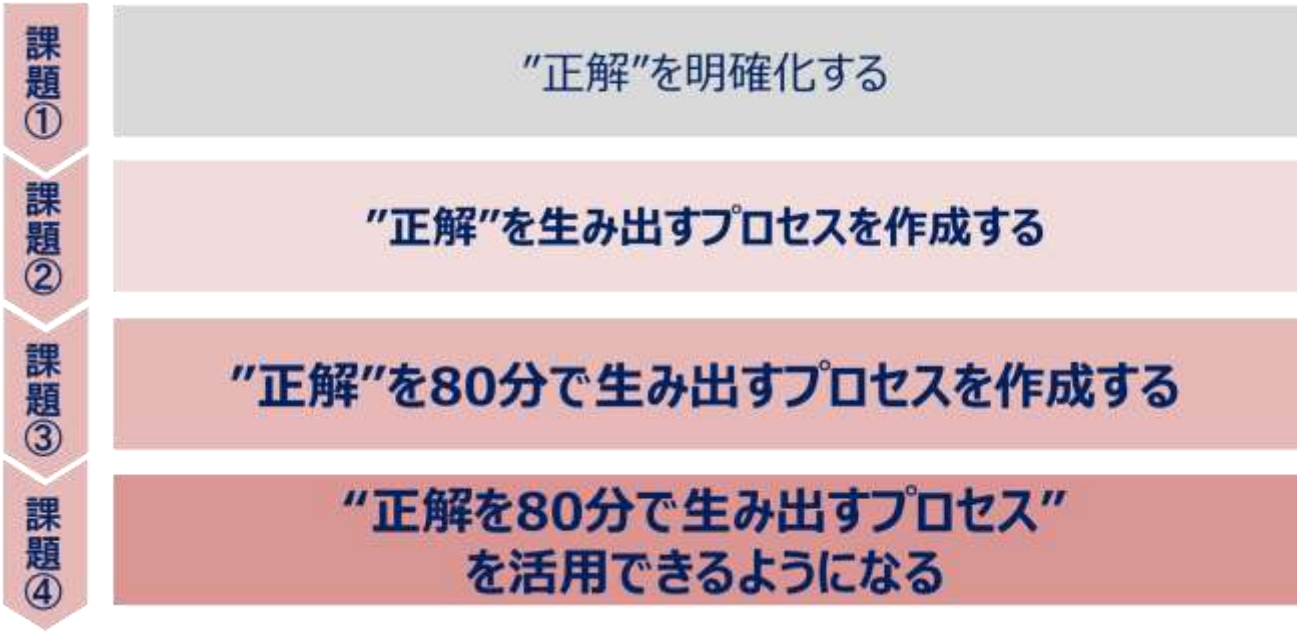
- **問題 4：80 分で正解を生み出すプロセスを活用できない**
  80 分で正解を生み出すプロセスを手に入れたとしても、本番で活用できなければ合格することはできません。

2 次試験における課題の設定

Point

- 4 つの問題から、4 つの課題を設定する
- 4 つの課題を、すべて達成すれば合格する

問題を 4 つに細分化しました。合格するためには、この問題に対して、取り組むべき課題を設定していけばよいことになります。4 つの問題から、取り組むべき 4 つの課題を設定します。



これらの 4 つの課題をすべて達成することで、2 次試験に合格することができます。

Chapter I-3

課題①　正解を明確化する

Point

- 2 次試験は一般的な資格試験と異なり、ゴール（正解）が不明確
- 進む方向を間違えると、どれだけ努力してもゴールに近づかない
- このステップを無視するのは、一次試験で解答を見ずに勉強するようなもの
- 2 次試験では正解（ゴール）を明確化し、進むべき方向を明らかにすることが重要

課題①は正解を明確化にすることです。

まず、一般的な資格試験と二次試験の違いについて説明します。
一般的な資格試験では、左の図に示したようにゴール、すなわち正解が明確です。そして、ゴールまでの距離に応じて難度が測られます。例えば、簿記 3 級に比べて、簿記 1 級の方がゴールは遠くにあります。しかし、どちらの場合でもゴールまでの道のりは明確です。

これに対して、診断士二次試験では正解が公表されておらず、ゴールが不明確です。
そのため、あたかも砂漠の中を彷徨うような感覚に陥ります。この時に、闇雲に進む、つまり闇雲な勉強を行うと、ゴールと正反対に進む恐れもあります。これでは、どれだけ努力してもゴールには近づきません。そのため、まずは二次試験のゴール・正解を設定する必要があります。

二次試験の受験者の多くは、このステップを飛ばしてしまっています。しかしながら、このステップを無視するというのは、一次試験で答えを見ないで勉強しているようなものです。これでは合格には一向に近づきません。

そこで、まずは正解すなわちゴールを明確化して進むべき方向を明らかにすることが重要です。
2 次試験では確かに正解は公表されませんが資格試験である以上確実に正解は存在します。ゴールの設定方法については、後ほど説明します。

Chapter I-4

課題② 正解を生み出すプロセスを作成する

Point

- 正解が分かったとしても、正解を生み出すことが出来なければ合格できない
- 課題②は、過去問をベースに”正解を生み出すプロセスの作成” する(イメージは事例 3 の生産工程)
- 理想的には、過去の全事例に対応したプロセスを作成する

課題②は、正解を生み出すプロセスを作成することです。
課題①を達成して 2 次試験の正解を明らかにしても、それを生み出すことができなければ合格できません。

そこで課題にでは過去問をベースに正解を見出すプロセスを作成します。プロセスは事例 3 の生産工程のように考えることができます。

ある過去問を解答プロセスに投入すると、合格レベルの答案が安定して生み出されるようになることが目標です。理想的には過去の全事例に対応したプロセスを作成します。これによりどのような問題が出題されても、安定して合格レベル答案を生み出せるようになります。

Chapter I-5

課題③　80分で正解を生み出すプロセス作成

Point

- 課題①正解が明確になり、課題②正解を生み出せるようになっても、これを 80 分で答案が生み出されるプロセスでなければ合格できない
- 解答プロセスの無駄をなくし、80 分にまで圧縮する

課題③は 80 分で正解を生み出すプロセスを作成することです。

課題①で正解が明確になり、課題②で正解をうみ出せるようになったとしても、試験時間の 80 分以内に回答できなければできません。

課題 3 では解答プロセスの無駄をなくし 80 分にまで圧縮します。この圧縮方法についても後ほど説明します。

Chapter I-6

課題④　80分で正解を生み出すプロセス活用

Point

- ”80 分で正解を生み出すプロセス”を作成しても、本番で活用できなければ意味がない
- 模試等を活用し、初見問題で解答プロセスを活用する練習をする

▼ 課題②, ③

- “過去問＋正解”を基に解答プロセスをブラッシュアップしていても、初見問題への対応力が身につかない
- どんなに良い解答プロセスを作成しても、その時点はあくまで道具。道具を自由自在に使いこなすための練習が必要

▼ 課題④

- 課題②、③で作成したプロセスを初見問題で活用し、80分で解く練習を重ねる。

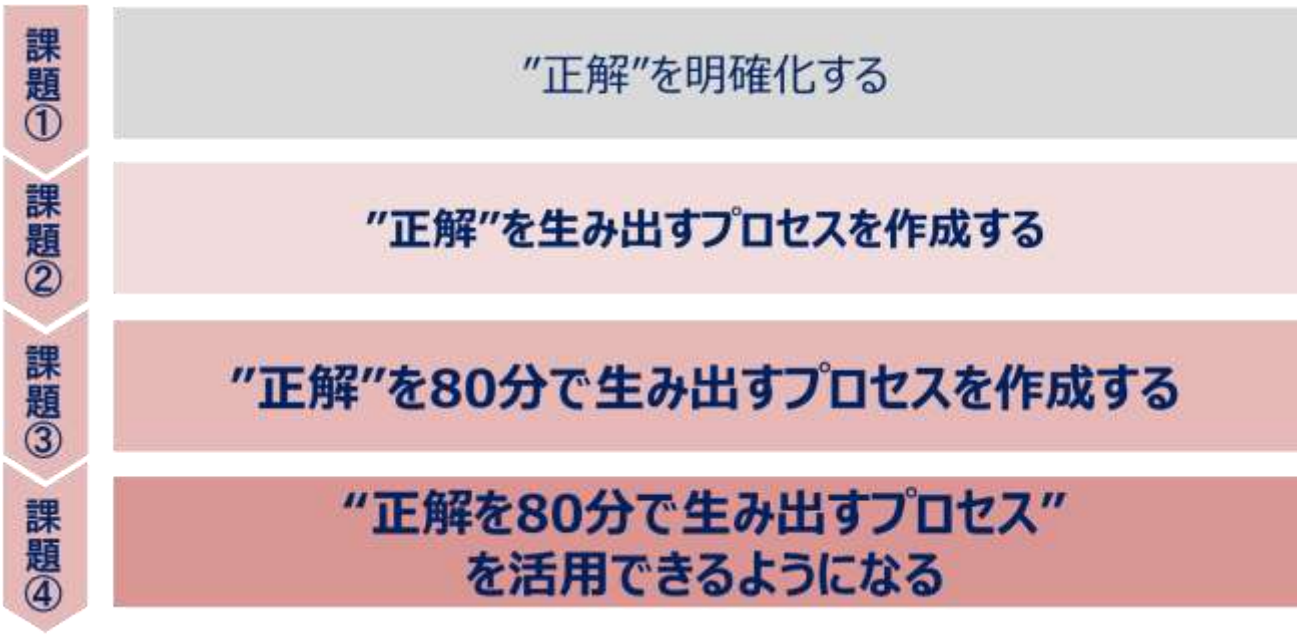
課題④は 80 分で正解を生み出すプロセスを活用できるようになることです。
80 分で成果を生み出すプロセスを作成しても、本番で活用できなければ意味がありません。

課題②及び課題③では基本的に過去の問題と、課題①で設定した正解をもとに解答プロセスを作り込んでいきます。そのため、これだけでは初見問題への対応力が身につきません。またどれだけ良い解答プロセスを作成してもその時点では道具でしかありません。

そこで道具を自由自在に使いこなすための練習が必要になります。課題 4 では作成したプロセスを初見問題で活用し 80 分で解く練習を重ねます。初見問題に対しても安定して解答プロセスを活用できるようになれば、課題④は達成です。

Chapter まとめ

まとめ



これまで説明した 4 つの課題に取り組むことで、2 次試験に合格することができます。
ここまでが本講義のサマリーになります。

自分では、今はどのフェーズの課題があるのか考えてみてください。
課題は明確になっており、課題克服の取り組みができているでしょうか？
これ以降では具体的に各課題への取り組み方法について説明します。